金光明經參詣者所圖會 一

ル 4
3525
1

門 ルヰ
號 3525
卷 1

# 金毘羅參詣名所圖會

攝都曉鐘成編輯
浦川公佐畫圖

東攝書房合梓

全部六冊

おしてるなる人窮り合曉
鐘成今年四月皐月のころ
おりまゐんたるまゝ与狹業を記
象頭山にまゐりて
来まゐるものゝ面わるゝなりし
ゝくハしまゐ海山をてまゐる所
ゝゝ或八神廟仏室ゝ

昭和十六年一月一日寄
尼野貴英氏贈

なる八宮殿のあと古歳物語の人乃
まうでゝそゝんのきりの鉢の道を
いとゝ夏草もふかくなりぬらん乃
真人家を無りうたをかり古歌
旧記おそれ人の口解を
拾ひ集へらふ乃きまつて
ゝのものを六巻とす金毘



羅参詣名所図会と号そのの
使ゆ玉虫明の迫門をすぎ
たるさゝれ人きゝ拾ひ集
の人ひとりあるゝ
ゆゝ
ん
くゝ

書ものこと詩ん[illegible]人乃
道の業ハさ[illegible]迦門戸を出さるも
まる也ま人乃[illegible]ハ昭光
[illegible]紙箱もたなのこと
字こ[illegible]弟まん[illegible]の人の
みを也さ[illegible]んも[illegible]はやき
けら弟ら[illegible]ら世ら

金一序二

ひろあらをすゝ[illegible]其ら
[illegible]り書ら[illegible]てのへぬ
弘化三とし[illegible]の長月

植松修理權太夫源雅恭朝臣

雅恭[illegible]

## 凡例

一此書ハ二國一覽の名勝志の類いにあらず只象頭山桑詣の路径と專と
一兵に其便宜に隨い巡覽とべき名所と著けるのみ

一寺社舊跡ハ大概次第小記し巡覽の心と以て著けといへども旅客往
返の勝手によりてハ道條の前後に齟齬し行程の損失又無しも
うらべ强ち巡覽の規矩とすべからず

一此の古跡彼の廢趾もど漏脱とる所あるべし是ハ爲来斯る冊子にせん
しかく記せしにうらべ予去る夏六月象頭山に詣でし砌り聞及びし
遍禮の霊場或ハ名小高き神社もど此彼し巡拜し家土産にとて
書止めと書坊の需めに固辭しかく粗綴りて出に故なり

一其境地と妄失して朧氣るハ圖と出さべ且太暑の苦勢し労きく

碑文もゞ寫し得ざるいゝ則ち雲井の御所の碑太夫黒の碑花立碑
寶藏一覽の記靈驗石ホの類ひなり是ホ再回彼土に渡海し悉
く寫しく拾遺の篇1祥らふまべし

一摸寫密もゝべして上木しがゝ元物志バゝく差ホ元再寫して拾遺の
篇に加ふ是ハ白峯山勅額門の隨身判官爲義八郎爲朝の像水
莖の岡の西行法師の像一夜庵の山寄宗鑑の像の類ひなり

一圓龜の津1渡るハ尋くハ詣人浪華より舩こゝ下向もはよりう
先舩中より眺望の名所と粗出せり む摂播の海邊先板1祥
ゐれバ是と肖紀備前の海濱より著はなり

一陸路下向の道條ハ續きて後篇に著し尚海邊の浦脱せしも
是ユ加ふ備前兒嶋の北濱西大寺大たぶの泊ホの類ひなり



# 金毘羅參詣名所圖會卷之一

目錄


浪華川口祝之圖　牛窓の湊　大島　出崎　小串の浦　新院左遷の圖　鏡岩大師堂　摧の途　笹童螺と拾ふ圖　唐琴の浦
虫明の廻門　名産鳥賊指甲螺　大石明神　胸上の浦　琴の鼻　尋麻の濱　経巻と漁民沉む圖　渋川　大師の清水　引網の天神　唐琴の泊
長嶋　嵐嶋　前嶋　小嶋　大島の廻門　山田田井宇野　帆うけ石　日比の浦　浦田の濱　引網の天神　田の口の浦
尻海　明神牛と倒れ圖　樫野の濱　直嶋　重石　日比の塩濱

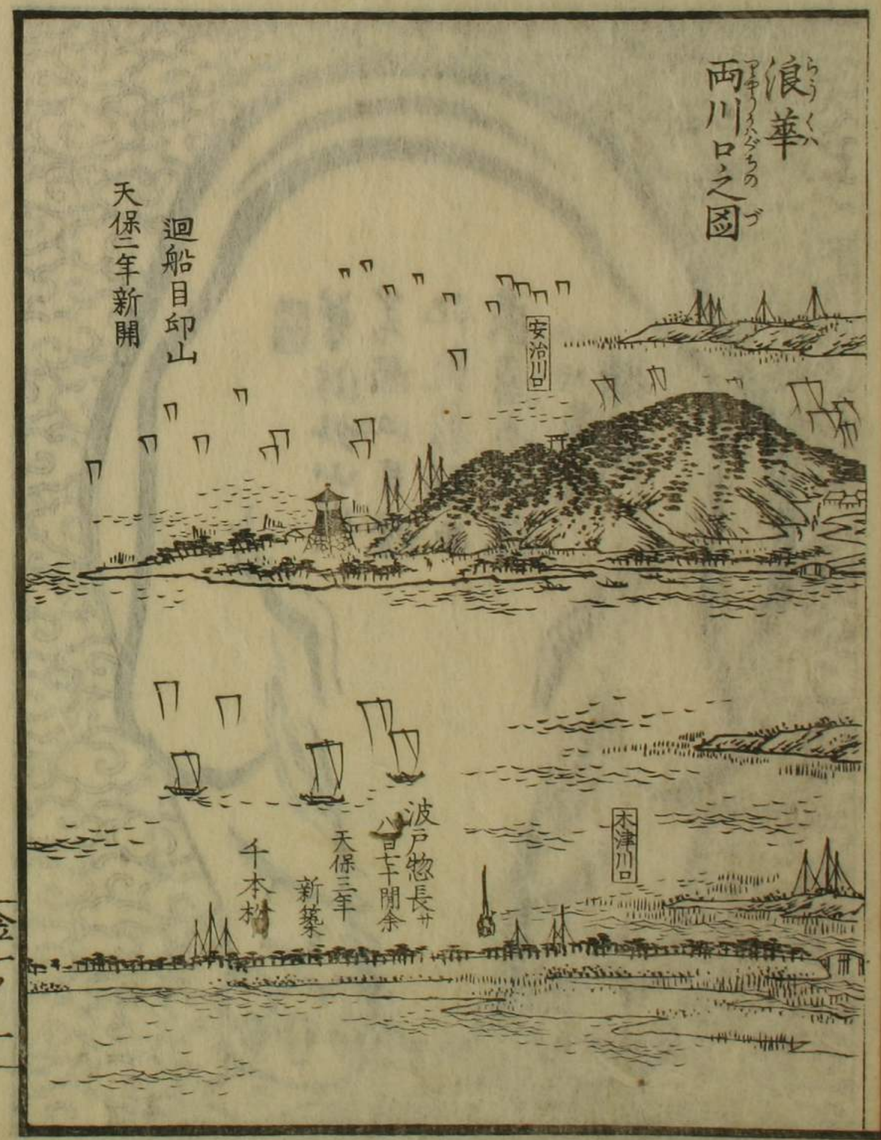
名産真田織店の圖　下村の浦
児嶋　名産糠鰕
化粧坂　化粧石　二ノ鳥居
瑜伽大権現御本社　幣殿　末社
金堂　多寶塔
蛭子石大黒石　地蔵堂
経の尾　鬼墳
神馬堂　燈籠堂
乘蔵院　寂勝院
小川　稿本　味野　赤崎
田之浦　天満宮

嶋の八幡宮　野鹿嶋の圖
瑜伽山一ノ鳥居　兒ヶ池
磴道下旅駕屋の圖　二王門
観音堂　御影堂
護摩堂　鐘楼　繪馬堂
奥院妙見祠　龍王社
蓮臺寺本坊　御守護牘府
通夜堂　祭堂
紫銅鳥居　石川成一の碑
釜ヶ嶋の古城　富軍絶交合戦の圖
吹上の濱　新荘八幡宮

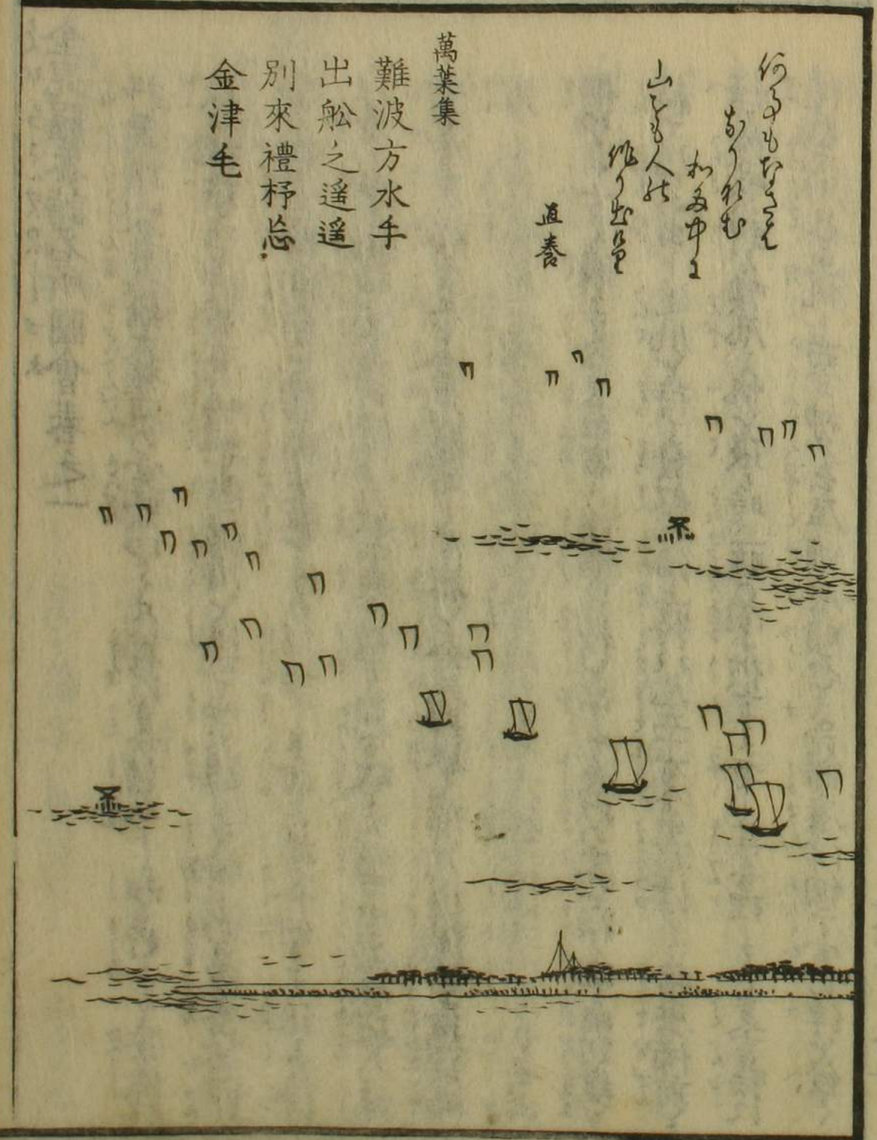


下津井の浦　牛頭天皇の社　扇峠　讃陽眺望の圖
祇園御旅所　本荘八幡宮　名産鞆　大島
真那邉　漁夫の妻魚と鬻ぐ圖　以上備前の海邉
塩飽七島の圖　本嶋　廣島　白鳥嶋　雀ヶ小嶋　新天島
長嶋　馬ヶ小嶋　高見嶋　手島　小手島　佐柳島
小嶋　下二面島　瀬居嶋　歯節岩　牛島
沙弥島　小瀬居島　與島
小與島　寶来嶋　羽佐島　不登嶋
岩黒嶋　櫃石島　鍋島　二面島

勇游好山川
罵國心目澄
記題象頭西
象鼻六絶勝
小竹散人


浪華
両川口之図
迴船目印山
天保二年新開
安治川口
波戸惣長廿八間余
天保三年
新築
千本村
木津川口




萬葉集
難波方水手
出船之遥遥
別來禮杼忘
金津毛
直養

# 金毘羅参詣名所圖會巻之一

抑象頭山金毘羅大權現の霊験のいちじるしき在しを諸人の知る所にして筆紙に及ぶ説話多けれども爾有ば嶮岨を越へ波濤を渡りて此地に詣づる夏暑寒に差別なく群参時に間断なし就中関東筋よりの詣客幾千萬なるを知るべ浪華津に着し此より渡州圓亀の渡海の船に乗て彼方に到る故に大坂市中に當出船乃旅駕屋多く俗に是を金毘羅船と唱へ凡道頓堀目木橋より西岸より戎橋の辺迄嶋之内長堀北へ淀屋橋の東西に拵渡海場に日毎出船ありて一日も闕る事なし各船宿に入湊懐の目標を出して乗船の客を招く既に晩刻纜を解て川口に出し追風を待て發船海上路凡五十有余里摂津より播磨備前を経て讃岐に到る順風に帆を張る時は一瞬の間に彼方に着し其安理なる事言語に絶へり先川口に出帆し西宮神社元庫濱磨明石を過ぎ餘磨津網干室の津を経て



赤穂の岬塩濱に雌手を見やり稍て備前国牛窓の湊に到る則此摂播の間は先に摂津名所圖會播磨名所巡覧図繪に委く出られば無益の筆墨を費さず及び是を省略し備前国虫明の迫門の辺より屏海長嶋牛窓の風景を始め漸に兒嶋郡南濱に眺望し下津井に至る迫の間を過ぎ岡山に尚委く遠うして岡西名所図會に題し三備州を始め藝防長の古跡を探り山陰道の四地西濃の名所に著すを欲せど是を移りて洋に出せば船中より海岸を見渡せるごとく描つて記者也然れば金毘羅参詣の陸路なども岡西の部に出せば且く筆を閣るなり

## 虫明の迫門

備前国邑久郡虫明の浦とす

新勅撰

浪高き虫明の瀬戸に沖つ汐風　後京極

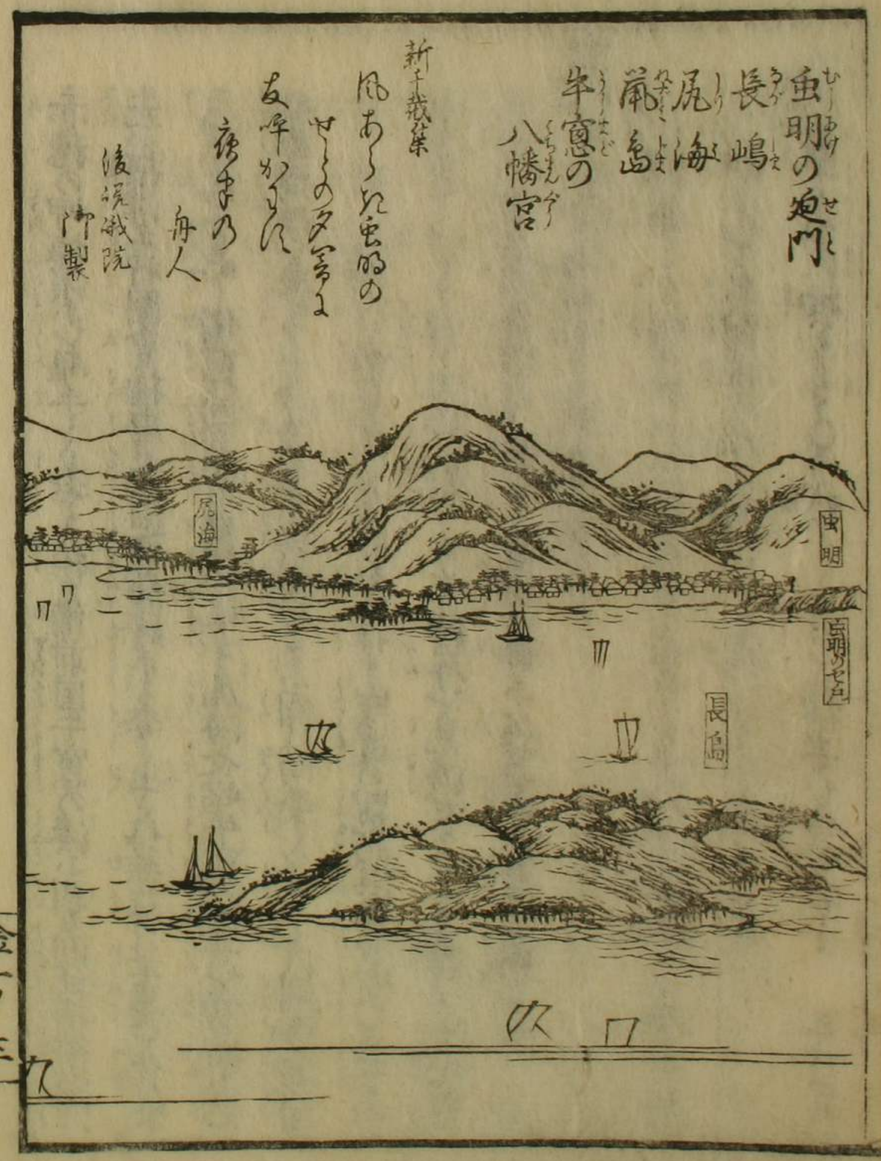
名寄

船もゐる虫明の瀬乃松ばかり長路ゆくとふら葉

後拾遺

影うつる神代ながらの神垣に月で藻塩ぞ虫明せし

参議雅経


虫明の迫門
長嶋
尻海
蘭島
半窓の
八幡宮
新千載集
風あらし虫明の
せとの夕なみ
友浮かりけり
後嵯峨院
御製
尻海
虫明
虫明ノ古戸
長島

海遠くあらねど
ふるめよりかりの
矢とぶ道よりて
舟出してけり
後柏原院
萬葉集
大船爾真楫繁
貫水手出去之
奥將深潮者于
去友
八幡宮
蘭島

牛窓の湊
播州の界と
さること
凡
十一里余
御茶屋

波戸
松番所
前島

屈海　虫明の南さう　長島　虫明のひうしの沖ふかう　誠島ちう　嵐島　牛窓の沖ふかう

牛窓の湊　同郡ふかう　牛轉　厳島清記　西国船路記

當津備前國邑久郡ふかう有て西海往来の客船風波と凌ぐ要津ふかう漕當国海辺の一都會にして後山高く聳て海とゞかぬ数百間の波ゝ絶えて通船ひゝ

能ふ湊の端に高燈籠と置て夜陰の目印ふかう金数多建ふかう船荷言及ばず諸商賈群集して交易殷盛の冨ふかう東の浜方に船大工の職人多く有て数千石遠洋船と造る船番所國守の御茶屋寺社の結構海辺に眺望ふかう風景の賞翫

本朝神社考

神功皇后の御船備前の海上にとゞまり給ふ時大牛ひとつ出て船を覆さんとふかう往古の明神老翁と化して其角をとりつて投側ふかう故ふかう其所を号けて牛窓しるしふかう

就ろうに其牛ハ蓋塵輪鬼の化ける所ふかう塵輪鬼ハ八の臂あり嘗て雲ふかう集て仲哀帝を侵ふかう帝是を射る身首二ツに分て落ふかう塵輪も又帝を射る帝

遠ふかう崩ふかう



山家集

うしまどのせとにあはのうでいらてさゝえしまりのを

ゝてふひとへのくらゐをとゝ

さゝえすむせとの岩つゞりあをつゞりあをはなれたるあり　西行

沖なるつくしつゝとてあまどもれいのくびしろふあり

岩の根にかくれもひとも泊ふかう紅そのひとろ岩のむしろ　同

天正元年六月廿三日ふかう利将軍義昭卿織田信長と確執ふかう宇治真木島の城ふかう

於て織田の討ふかう亡され西國ふかう落給ふ折ふかう此所ふかう着せ給ひしるふかう南風烈

しく吹て一森雨勝時ふかう最落涙の袂れとふかう連日逢纒の御用ふかう

御枕と歌て給ひ紅哥一首と綠ふかう海中にて抱ふかう八大龍王ふかう手向給ふ

云語同ふかう船頭の張八牛窓ふかう住の夜ふかう初めふかう　義昭

八大龍王も忽ち感應やうりん顕く順風帆をうつ

夫本集

牛窓とはく水鶏の音とうる波打上て紙ふかう同ら岸　後頼

金一ノ六

井上通女日記云　廿九日の夜あけてうまを牛窓にして
世と後るゝと牛窓のゆうれ漕ぎ船出でやうん　通女

名産烏賊　當浦の沖にあり他に超て逸とする事最も味ひ美なり

同指甲螺　同海濱に多し他に稀なり云指甲螺は白撓しも号く長凡七八分計
玉地に似て色青黑く殼の類なり

前島　牛窓の前にいう四瀟あり牛窓の前にあり出張し

小島　前島の西に並びて二島あり俗に希の小島と云

犬嶋　牛窓の湊より二里計坤の方沖にあり相連て二島あり一島人家此面
彼方に有て農業を営む一島は山巖石と撲重なりて更に人住べ
地にいまゝ山の絶頂に犬の形に似たる巨巖あり此を犬石と号し明神と称ず
希に名石と達て是を祭る巖の大きさ圍凡五丈計なり希代の異石なり里俗の曰
西國の匹鄙に犬神と号せる者ありて人を脳と事なり是脳ある者なり来て



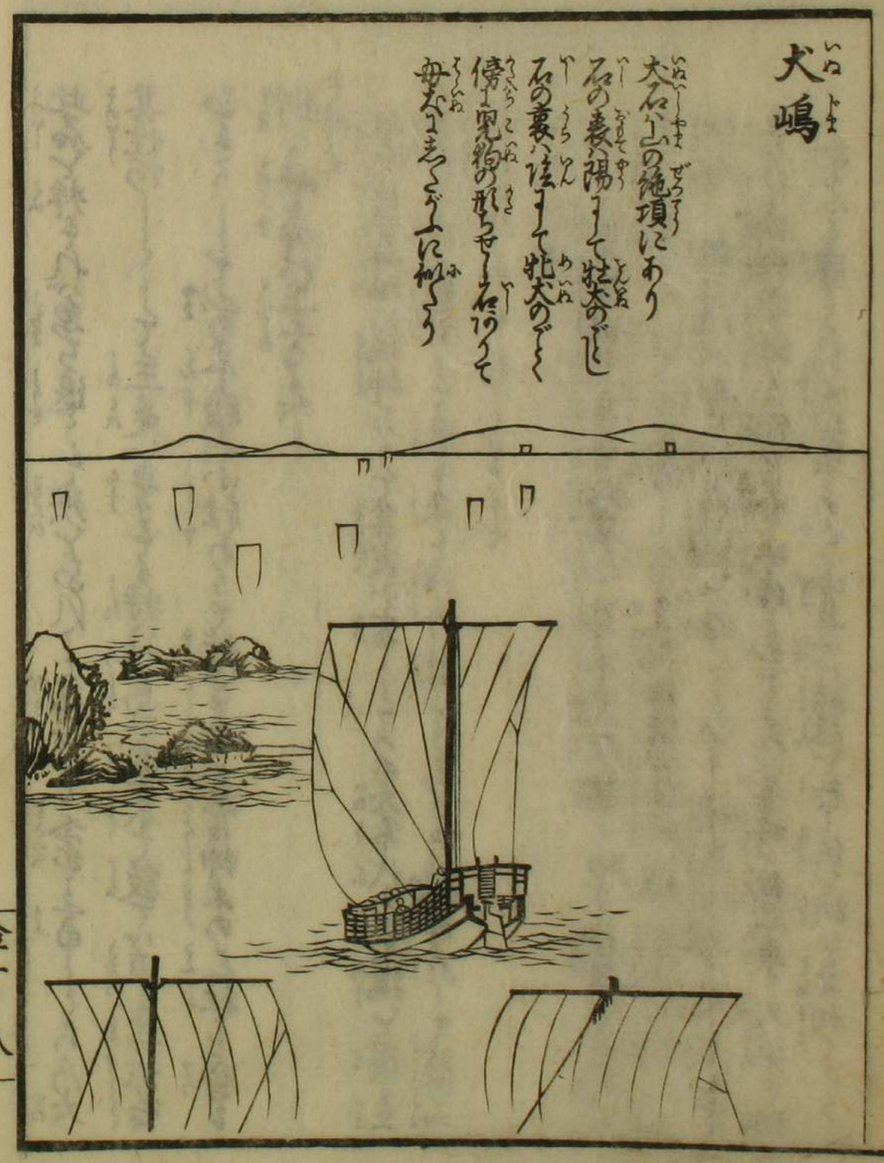
此石を拜されば多ち退くて殃なし又家に畜ところの犬
其性いまゝにして主是を労とする時此島に連来て放てば直に其性を
あらためて山の半腹に小社あり犬を祭る
則ち此島の生土なるべし

土人傳云
此犬は往昔此地に猟師ありて其家に畜ところの犬希代にして猟を獲ること
数しば放て籠を置て夜も床を同じ臥ところに猟師死して後此山
中に入りて死しぬ

犬狗養畜傳
周禮六畜註獸可畜者六畜牛馬羊犬豕鷄という論語の古注も
犬は守禦ぐと仮て人に養ふ云云と又凡俗通曰俗説に狗は賓主を別て云
守禦ぐ故に門に着て以て盜賊を避くるなり續高僧傳に犬を防畜と
云ひ拐嚴釋要鈔に狗を犬と名て守狗と云ふ云ふ是は兼好が徒然草に犬は守護に防
ぐ物なれば必ず有べしと云ふ實に犬は能息を知て仇を刷ひ臭利くして

## 犬嶋

犬石山の絶項にあり
石の表陽にして牡犬のごし
石の裏陰にして牝犬のごく
傍に兎狗の形ちせる石ありて
母犬の走るごとし山に似たり



金一ノ八

## 犬島の瀬戸

純友釜ヶ嶋の城ホ
揖竜り人合戦の時
純素汐の通る有て
合図とする兵船
二十余艘漕来る山
犬嶋の瀬戸とする
塞ぎ緑波を作て攻る
えり純友ちりぢりとなる官
軍ちりぢり敗走せしと云

絶氣とかゝ能家と守て忠事の人と肉ゝの代嚴く吹霧蹤と隠ぐ官家賤民畜
ぞん者有ぐゝ者世昌犬八特獵の時まゞ山野ゝ放ち入て禽獸の所在とかゞむ乃
官あの寞獸ゝう原来一切の邪魅妖狐ゝ祓穰ひ遠るが故ゝ通家ゝ是と禁ずる
ゝゝう凡犬の忠切人ゝ勝れ其報ゝる年の恩と知り是と殺ぐゝ往古より
和漢ゝも亦其例ゝかゝるゝゝ　尚犬の統領ゝ有ゝの中ゝ獣ゝれば異ゝ

**樫野**　又柏野ゝも　牛窓ゝう一里北ゝあり　遠浜ゝりゝ多く遠と製ス

**出崎**　**米崎**　**小串**　**胸上**　いづれも兒島の海邊あり　**山田**　遠浜ゝり

**田井**　**宇野**　田邪ゝてゝ海邊ゝり此辺遠浜多ゝ

**直嶋**　田井の浦の前ゝあゝゝゝれ島ゝう

保元物語ゝ云ふ新院八月十日御下着の由國ゝう御請文到来ス此ゝ松山
ゝの所ゝ御在所ゝるゝ國司院ゝ直嶋ゝらの所ゝ御所と作ゝ出され給ふ夫ゝ
移ゝ世ゝ白峯ゝ御墓ゝ住子云ふ大ゝる所ゝう新院院ゝ渡ゝ國者閑郡



八輪嶋今の高松ゝ着せ給ふ小在廳ゝ木の何某嚴ゝ言ゝて陸ゝ上奉ゝ
是ゝ後ゝて擬ゝ直嶋ゝ御船ゝ寄せ給ふ折ゝも其夜
月さやゝゝ冴ゝ宴ゝ鄙人の心ゝ都ゝ思ゝれ月新ゝ八変ゝ
御嘆ゝ中ゝも御心ゝ慰ゝ給ひ終夜御琴ゝ弾ゝ給ひゝ今尚其事跡有
せゝ其後松山の津ゝ着せ給ひゝ國司ゝ御所ゝ造り出さゝれ
在廳野太夫高遠ゝ造りゝ松山の一宇の堂ゝ今ゝ安ゝる則此所ゝ在ゝ
こゝ年是ゝ林田の雲井の御所ゝ往ゝ今尚其跡ゝ有り奥ゝ記ス

**琴の鼻**　直嶋の端ゝ云ふ所ゝ新院ゝ御船ゝ寄せ給ふ琴ゝ弾ゝ給ふ所ゝ
今ゝ琴の浦ゝ云ふ　遠の沖ゝ白帆ゝ見ゝる船ゝ多ゝ麻村の浦ゝ出ゝ

**帆懸石**

**重石**　麻村尾道村ゝ境ゝ巨巖ゝ重ゝ重ゝ人力の業ゝ成ゝ

**日比の浦**　兒島の出崎ゝ海上凡ゝ二里計彼戸ゝ繰ゝ松ゝの便ゝ

直嶋琴の島

此地に船がくりの渡里にて人夫多く雇と並べて建つるり高さ一ぐる迄く
山家集 日比渡川を中方へ出て四國の方へ渡らんとしまふ
風わーくくふじくくりくく

## 椎の途

此の浦の沖の中ほど讃州香川郡法華村神在居の端より四三里汁沖にあり新院五部の大乗経と涙あふひーわーぐ主人畧伯て拵ゑ云う大椎小椎にて二流つり
新院配所にて御自筆に書寫ーたゆい
せあて筆に跡まるーも都迄ー置ーかーー思ーたハ幡山ゝ高野山ゝ若御免ゆーぶ
鳥羽の安樂寺院の御墓ゝ置奉ゝ及申平治元年の春乃頃れ和まの御室申
さをまひーゝ五の宮ゝも関白どの苗代ゝ申さを給ゝ殿下ゝもゝ招ゝ
申さを給ゝも主上終ゝ御ゆるされもうして彼御経と則ゝ遣ハさる是ゝ後て
御室ゝ知ゝ知ゝ都迄事有れば新院大ゝ憤ら給ひ我悪心懺悔の為此経と書
百奉ゝ所ゝ然ゝ小筆の跡ゝも都ゝ置れざる経の後ゝ至て分ゝ



新院怒ゝて書ゝ
ゆゝ五部の大乗経と
椎の途乃海底ゝ
沉ゝ給ゝて海上ゝ
火燃ゝくゝるゝけるゝ
事ゝよゝりゝられ錄
とゝして納めるる

此経を魔道に回向し我大魔王と成て天下を我領にせんと御誓ひ有て小指を喰
きりて其血をもて五部の大乗経の箆に龍宮城に納むと記し給ひ此箱を途の海に浮さ
せ給ひけれバ海上に火燃発し童子出て舞をまひて納めけるとなん

渋川 日比の浦より半里計西にあり浜辺ハ松林ありて絶景なり此も石塘の波なりて
船どまりの便とす

浦田の濱 渋川村の浜をいふ

山家集 渋川のうら田にをさなきものどものあまたものを拾ひけるを問あれバつみと申ものを拾ふなりと申けるを聞て
をりたちて浦田に拾ふ蜑の子ハつみよりつみを習ふなりけり 西行

一説に此つみといふハ貝なりとぞさもあるべし然れども其形いまだ詳ならず
愚按ずるに螺の類ならん歟和漢三才圖會に香螺俗に云長螺一に云倍奈太礼
今云夜啼螺又豆布ト云
按に云香螺ハ状辛螺に似て口長く其肉白く軟に甘美なり蓋海贏ハ和名豆



比總名也今人香螺を以て豆布と曰 豆比通音 世俗婦人陰戸隠て貝と
称し又轉じて豆比といふ亦然りト云
又田螺和名太都比俗ニ太仁之ト云又甲贏 豆比ト訓ズ 又一書ニ海螺
甲香光螺と訓ズ
徒然草甲香之段ニ蒿抄ニ云甲香と一本にぞくし有ぞいとおぼつかなや
然来なし今金沢にて尋まバへなたりといふ又ほらぶものあり兼好が時を
つめたりと言れるにや其ほらに似て少し大きくして口の細長に出て貝なり
夫をへなたりといふ今夜啼といふものなるべし又云都にても秋
啼ともいふもつぱら武蔵にてハへなたりといへりや否
然れバ海贏甲螺の類ひを称て豆布又豆比などいふ事明かなり
香螺などハ其肉厚くして甘く且蘑ハ衆香に雜てこれを焼バ芳を
益し本草に見へたりされバ浦田の蜑の子等が拾ひしハ香螺の類ひに
して食用にせんとて拾ひたるにや香具の用に需んとて集むるか他
国にて豆布といひ豆比といへバ此国にハ又豆美といふなるべし
貝贏螺ともにかひと訓ド其形小異あり

西行法師浦田の渕にて蜷とるとて螺拾ふと
とて示とゝむひしりの山ゐ其ゝ

金一ノ十三

引網濱　浦田より一里計西にあり引網村の海辺とゝ

大師堂　渕辺に小堂あり弘法大師と安倍宰當嶋郡に四国八十八ヶ所の霊場
遍路とゝるゝ此堂も其一所あり

大師の清水　大師堂の傍にあり清潔の霊水なり緒辺の井水にまさる

引網天神　引網村の山の半頂にあり當村の生土神なり

八房の梅　天神の社のうしろにあり其事跡詳ならず

阿弥陀堂　同じ傍に小堂あり弥陀佛を安し土人の曰く此堂の流生昔海中より網にかゝりて
上にもあり村人とり網と号く又天神の宮の流なるも云る事不詳

楯場島　引網の浦の長くゝ出たる所此辺をゝて糸をゝ

唐琴ノ浦　唐琴ノ浦　引網浦とゝ　田のくゝ凡十八丁計

古今
都までひゞき通る唐琴ハ波のとすげてなるゝ　素性
足ゝの松風乃めゝしてハ浦やゝ〳〵唐琴ハ浦
波の音琴の唐琴ハ長乃とゝぐやゝ〳〵とゝ

田井ノ浦
大師堂
慈恩庵ト云
牛頭天王社
西村の生土神ニて
六月十日祭日
牛頭天王
大師堂

鏡岩大師堂
巨巖の間小小堂と建る
まつ〻〻〻〻〻
なゆ〻〻〻毎の
枝ゐ〻〻
〻〻〻
小西乃
〻〻〻
〻〻と
定家
田井
大師堂
字野

## 重石

麦麻村於道村の間の渓辺にゆり巨巖重なりあるを

山辺より沖の方遥か帆かけ石見ゆる恰も帆をうけるふねのごとく

重石の陸より山の形勢仰ぎ見るごとく

都て此渓通りハ雅亶高の地なり

日比之浦
塩濱
推ノ途
日比ヨリ渡川江十八丁計
推ノ途

後撰拾遺
船もむる湊の波のよるよる
恋
なれや
なれ
前大納言
為世
日比
塩ノ濱

浦田
波川
逍遥院

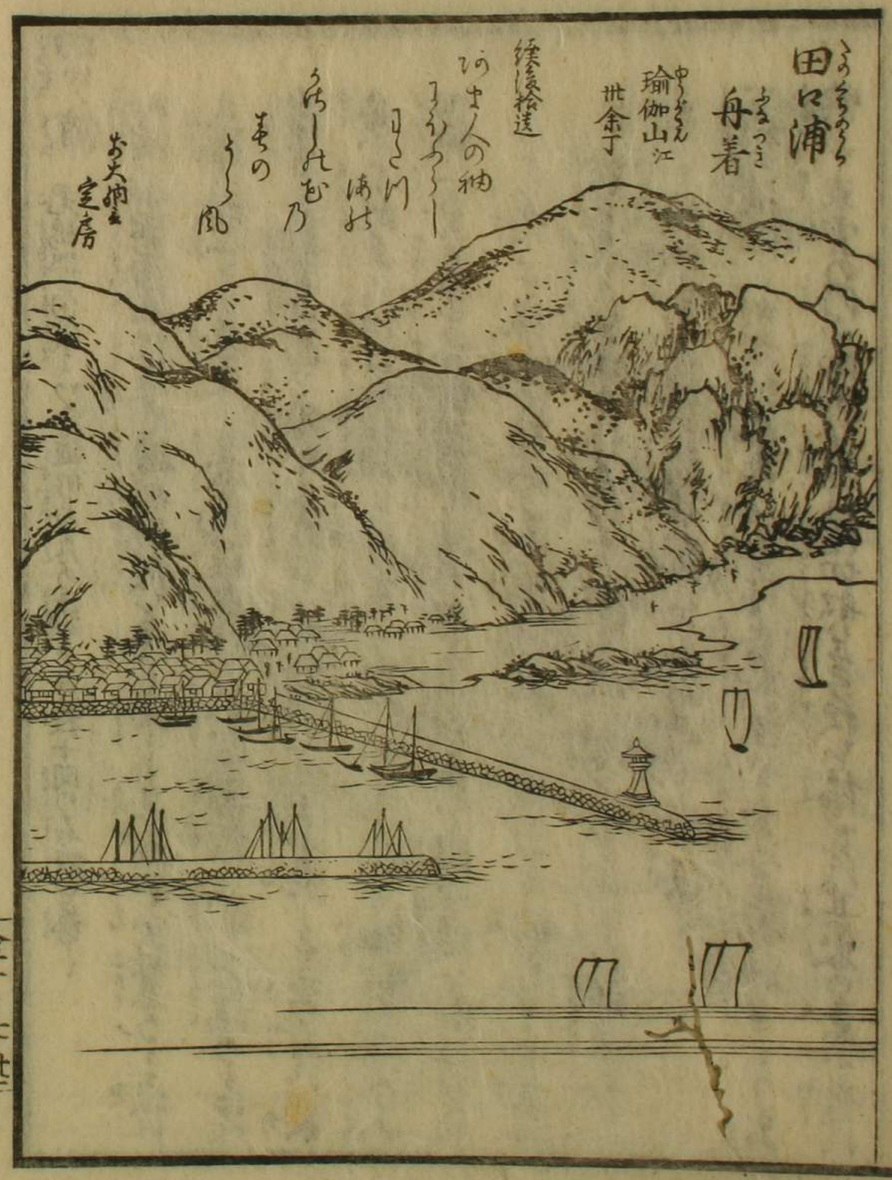
実政

引網浦
大師の清水
唐琴の浦
或云
琴の浦
涼しさや
唐琴
志ま
海士
馬門
大師堂
清水

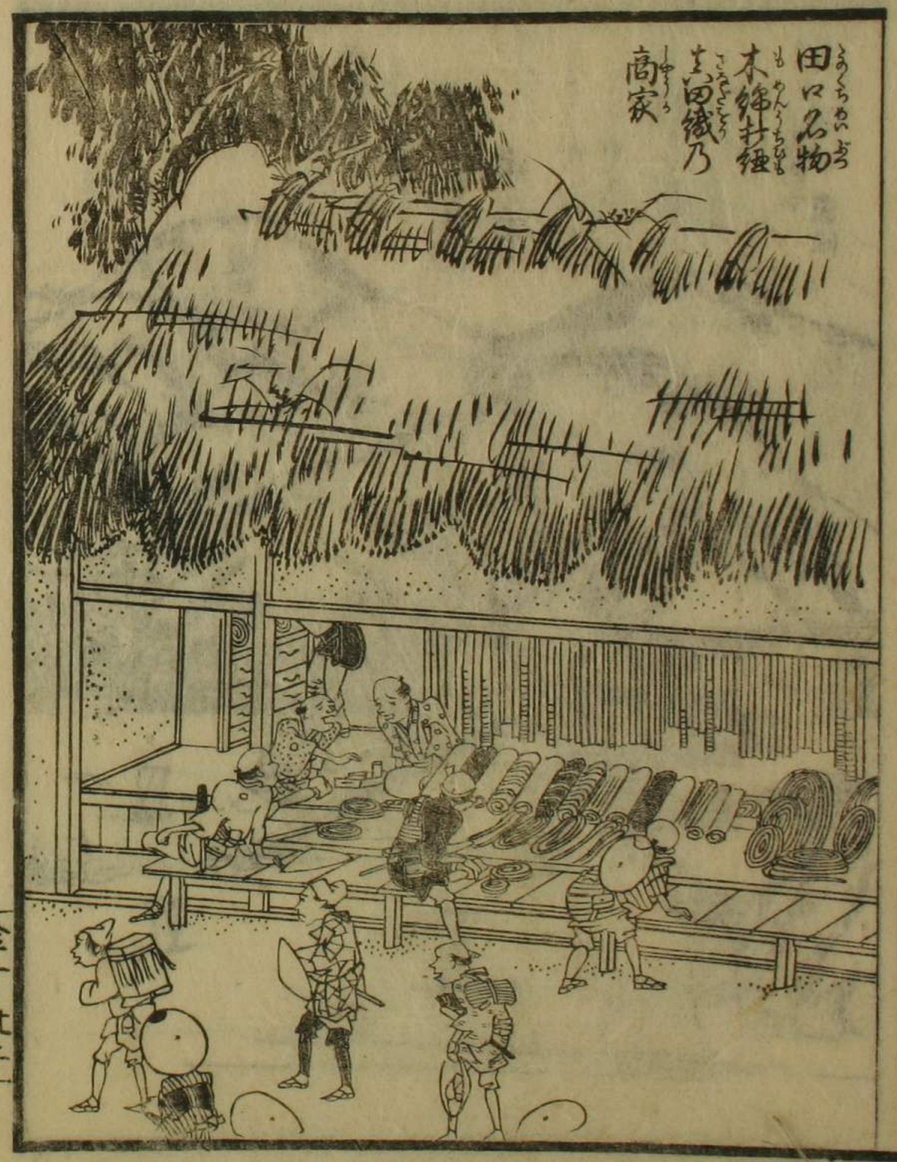
金一ノ十九

田口ノ浦　兜嶋郡南濱ヨリ通船為客の後のうに数十間の石濱と為る

此浦ハ中國西國往返の通船風波を凌ぐ泊り且瑜伽山の禁ゆるす故に
糸綿の積入こゝに着岸し且金毘羅参詣の旅客圓龜に渡る船場つゝゆく
濱方ニ船宿建列す瑜伽山糸綿の道條ニ此地の名産とす石乃家
毎ニ才綿糸の組紐十数種に染色うつくしく太さいと細くわりて
田織ハ二重夏帯袋織相撲上括ニ用ゆるまで彩糸と雜て織て高と呼せし
ゆゑニ並べて旅人の進む尚ニ金錦の帯地とも織出せり何れも奇麗に
して家も庭ハ結ぶられ求むる人多し故に至つてゆゝしく船着もよう
是より瑜伽山ニ参詣の行程山路二十余町所々ニ町石あり
下村の浦ハ十八町後州九亀渡る海上凡六里余乗合の船晩方より出
帆して東雲の頃ニ向地に着ハ借切船ハ三歩と為ぜ其客の意ニ應じ


田ノ浦
舟着
瑜伽山江
世余丁
大船
定房

新撰古今
大納言
重経
瑜伽山
田ノ口
塩ハマ
ガこ山




金一ノ五二

下村の浦　田口の浦より十八丁ばかり西にあり其道傍塩浜尽く

此地も田口ふ舟〻〻通船の泊便宜ありて也　愛宕山の麓あるゆゑ

来詣の旅客あり着岸し登山するの多し　行程此ところも二十餘丁

あるて田口にかゝる事なり何ぞも其便ありて小貝圓亀小浪るこゝ海上凡二里

汁通船夜毎ふ出帆する西へ陸路と往来は金毘羅諸國遍路の旅人其

余商客あり農夫わう多し船をるいり朝ふ着あり日暮時ふ出船

なく至て繁し船をるう漁色ハ勢て塩濱にて數丁は間塩屋の烟立暮とう

鴻八幡宮　下村の町の西の方山の上かゝる尚所は生土神にて此山上より海上の絶景ひう

新著聞集寺及備前の浦色と船にて通り給ふ向の方より黒雲一むら

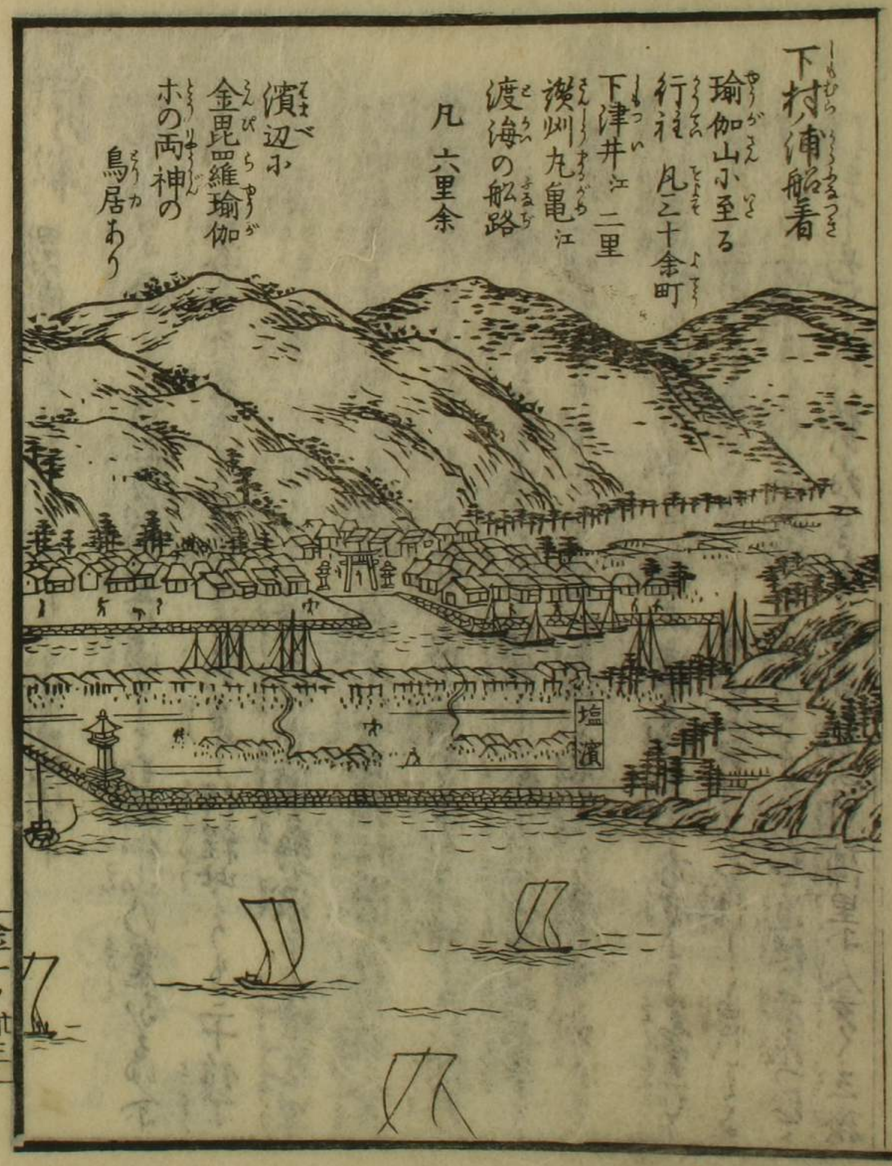
大村周防守及備前の浦色と船にて通り給ふ向の方より黒雲一むら

立来り其中にて鳴呼かゝるやと呼ぶこゑの中より足のさゞめくと怪しく思いらる

程に船の上の間近く来る雲の中より足のさゞめくと近従の者共つゞて

聞もつゝ見とゝれ雲の上なるあり不審に思ふ所ふ浦里ふ人妻く三發

三葉集
塩ハマ
鴻八幡宮
院市製


下村浦船着
瑜伽山ハ至る
行程 凡二十余町
下津井江 二里
淡州丸亀江
渡海の船路
凡 六里余
濱辺ハ
金毘羅瑜伽
ホの両神の
鳥居あり
塩濱

ぞしらバ足軽二人船より出し其妻を尋させ給ふ所にて八歴く付者ありし
材木屋が母つのぐ慳貪放逸の者なりしが一日便に行して外へ出しところを
黒雲立来り連行しといふを頓て夫が子ありしものを続ひ船に連来
りて見せしに是こそ其が母にてありしとて泣く死骸をとらし給ふ実
文十年の事なり世に火車といへるものゝ悪人を摑みとるといふこと
のありしが是も夫が所為なるべしといへる者をふるひしと云

## 兒嶋

兒嶋郡一圓の惣名なり當國十一郡の内にて海を隔て一嶋なり
古事紀伊邪那岐伊邪那美二神生吉備兒嶋亦名謂建日方別
中略
自吉備兒嶋至天両屋嶋并六嶋と云々委ハ關西名所圖會出

万葉集
浪の上に見ゆる小嶋の嶋がくれ何のおもひつゝしあひ別れるぞ　金村

続後拾遺集
夕されバ塩風さむし波まより見ゆる小嶋に雪ハふりつゝ　鎌倉右大臣

山家集
備前國に小嶋と申嶋にわたりたりけるにあみと申物を漁る所ハ
各々我しめて長き竿に袋を付て立渡すなり其竿の立そめをば



一の竿とぞ名付たる中に年たかき海士人の立そむるなり
立るとて申なる詞ハ聞侍りしこそ涙こぼれて申ばかりなく
おぼえてよみける
立初るあみとる浦の初竿ハ罪の中にも勝れたるかな　西行

是ハ當国の海上に糠鰕といへるもの多く生ずるを漁る之則ち醢に製して其味ひ
至て美にして他の及ぶ所にあらず酒客も賞翫す故に名産とし糠鰕塩辛と
号す　和名抄ニ海糠と云本草の糠鰕と云もの一物なり
夏糠鰕ハ立夏より立秋に至つて出る其大さ四五分に過ず色白くして
微赤をおびり秋糠鰕ハ九十月盛んに出る其大さ六七分色白く頭と尾と正紅なり
此糠鰕ハ鰕の中にて至つて細きものにして而も鰕の苗にあらず一種別にして
終に長ずる事なし前に山家集に云西行の哥よみ給ひしハ唯兒嶋とのみにて
何れの濱とも定かならざれど今ハ蜂濱といへる浦にて専ら漁て塩辛に製すとぞ此蜂
濱と云ハ兒嶋の北濱にて南浦とハ方角違ひあれど書の次手に往せてこゝに出す

宝来

串ふくるとのゝ
あひをくると何ぞと
いへれバ恰刺と乾
くゝるあらしや
けゝる成閉て

おれゝくハかさ
刺く乾もとぐと
そ海ぐりよりハ
ゐもたらあゝ

西行

金一ノ此五

瑜伽山蓮臺寺慈聖院　児嶋郡こいり田ヶ浦下村浦おくやる行程くもふこ千金丁

本社瑜伽大権現　本殿小安置に昔し行基菩薩の作妙佛あり

本地　阿弥陀如來　薬師如來　右ふ同

幣殿　前本地佛二尊

末社　本地彌勒菩薩　同　辨財天女　同　三賢荒神　同　四天王　本社の傍に

本堂　本尊十一面観世音菩薩　行基菩薩の作　服士三天　當山中興　増吟僧正の作

御影堂　弘法大師　本堂の右の方にあり　本尊大師乃自作　金堂　末再建調

多寶塔　本尊五智如來　御影堂の上の脇の地にあり　傳教大師の作

護摩堂　本尊不動明王　服士　矜迦羅制多迦の両童子と安置　本社のかくらあり

鐘楼　護摩堂の向ふにあり　繪馬堂　本社の向ふにあり　奉献の名馬木馬ホとむ　備後福山藤井某しゝ献る布黒白二疋の木馬あり

蛭子石　大黒石　本堂の後山の岨にあり　地蔵堂　本堂のうゝらにあり

瑜伽山蓮臺寺
二王門
磴道下旅駕屋
此辺の左右旅駕屋多く建
つゞれて諸人の泊支度と
迚も何もも家建奇麗
うり商ふの店紙とも
俗る赤地織をいさぐ
神使白狐の図ゆう諸人
いづれも求めて裏
ちゝ老ゝれ上本
線のうらしも
ち白織るれ小倉
の帯地ものあるも
家多ー色
と名産ゝれ

金一ノ元六

二王門
高札
茶堂
此門より須弥壇
洞のもの最へつゞく
御守の箱御山の図ゆと
美敢八町の中る事清の
九の方ゝ

奥院妙見祠　灵宝塔の上にあり北に向ひて昔は南向なりしに神夢新にして遷宮ありし時ハ怒ち崩れいりて難義に及ぶ夏夢なりしと以て祠の向を変るとぞ

龍王社　灵宝塔よりもゝ〳〵ぶ

経の尾　東の山の半腹にいろ〳〵行基菩薩大般若六百巻を書写し埋め給ひ所なり経尾山の名こゝに起る

鬼塚　経の尾の傍にあり鬼の骨と細器を物ゝ埋り一所にとゞめ世に瑜伽の鬼塚と云ふ其名高し

方丈客殿、本社の坤の方ふかいり一湖水間二八紙間三孔雀間四大床間

五柳間　六群仙間　何れも結構義業あり林泉自然の山岳にして

巨嶽碧ち樹木繁茂して景色言語小絶し

持仏堂本尊愛染明王並に不動明王石像の弘法大師　何れも増呼僧正の作

黄金釈迦牟尼佛　長二寸五歩　當山の南の渓より涌出し給ふ山所なり

地蔵菩薩　阿弥陀如来　両尊ともに恵心僧都の作皆ともに持仏堂に安し

御守護櫃所　本坊の前にいろ〳〵詣人御札をこゝに受る　神馬堂　御守所の下にいろ〳〵神馬二疋を繋ぐ

本社
末社
末社
護摩堂
鐘樓
銅鳥居

金堂
大師堂
本堂
大黒石
地蔵堂
石成墓
通夜堂
繪馬堂
聲龍堂

金一ノ北九

山門　執金剛神の二王と安氏行基菩薩の仏　銅鳥居　二王門つゞく

茶堂　山門の傍にあり　結人こゝに憩ふ

乗蔵院　寂勝院　山門の西ふかく　寺中あり　其余寺役家挙て枚〻〻

往昔本社の山上に五重の大塔并に堂舎是に列り本堂の後の方に金

堂是に續きて恵堂経蔵番神社燈籠竜堂通夜堂大門お魏した

ゞ後年廢して闕る所多し故に近曾四觀に復せん事を願ふ

其建誓最中なり　神力霊験の掲焉は言も中く愚にして筆紙

の及ぶ所にあらざれば遠近の國〻より山川の労をいとゝ暑寒に

時と嫌ひず歩〻と運ぶこと夥し是によりて二王門登道の下より一

鳥居まで數町の間左右旅駕屋軒をならべ其余諸商家諸職店に

も木綿の打紙類真田紐小倉織ちんど鬻家多く結人もまた土産に需む

# 當山縁起曰

抑當山ハ人皇四十五代聖武天皇の勅願ニ依て行基菩薩の開基ス其始天平年中菩薩大僧正ニ轉位して朝恩と報ゝ奉らんが爲ニ天下泰平の御祈願と修ちゞ江一宇と建立せんとて自ら遍く雲水ニ遊歴して福有縁の境地と撰び給ひつゝ竟ニ兜嶋ニ渡て此山村の茅屋ニ宿り給ひる夜ハ夢ニ神人来りて告て宣く我ハ神世の昔ゝ此山中の主ゝる産授知命と僧正此度王法守護の霊場と造立せんとの大願と起ニ給ふ志殊勝なる我住む山ハ無雙の清場なれば早く来て梵境と開きこゝ密瑜伽行と修ゝ給へ國家安全繁昌ひろくむ又我とゞ即ち瑜伽大權現ゝ歸して齋祭ニ給ふ我もゝ長久ハこゝ密擁護の善神ともりて利益と施ん努く怠ひ給ふなと宣ふと見て打覚れば夢ハ曉鐘遠く聞て月纔ニ曙ふる僧正信心肝ニ銘じ



やゞて山ゝ小谷ハて些方彼方ゝ尋ゝ給ふニ此山の辺りハ殊更無垢清浄ハ霊地と見へて山高ゝして傑出せる山塊ハ竜の臥る如く虎の蹲る似て奇木欝ゝして密元ゝて傑出せる山塊ハ竜の臥る如く虎の蹲る似て奇木欝ゝして枝と交へ霊草芬ゝて花と開く月出て無明の闇と照ニ雨濺で煩脳ハ塵と滅ハ岩もる清水冷ふ流出て八五塵の垢と洗ふ〻扨吹風長く響きて八六欲の夢と破ふつゞ羊腸なる徑路と經て人家と隔るこゝ二十余町南北東小海ニ連なり萬里一望水天一色の景色誠ニ有ゞ比所なりれば神祇の地ハ今ハ思ひ合て大般若經六軸と書写して是と埋め其所と經之尾と名づけ一寺と造立して即ち經尾山瑜伽寺摩尼珠院と号ニ彼神の教化如ゝ瑜伽大權現の御社と建て原来瑜伽ハ相應して慈悲比二德ふれば甚ニ勝る阿弥陀薬師の二体ハ本地佛と自ら彫作して安置ニ奉

ア佛法王法の守護神と崇め之向こ密瑜伽の行業を修し國土安穩の祈願を
怠り給ハざりる時ふ此山の西の方ふ夜ふ〳〵怪しき光り出ぢりると御覽ト
給ひつるる故ふやうて見行ぬるに一株の香木ありれば是を伐て又ひつら
ら十一面の觀世音菩薩の尊像を彫刻し本尊ふと作ひなひる即ち八体
尊是ろり斯る尊ふ精舍ありれも延曆廿頃〳〵〳〵阿黒羅王と号そる夫婦
こ兒の惡鬼ハの方〳〵もり〳〵来て住て寺内の僧俗を追出し近里の人民を傷害
とる夏數を志〳〵人〳〵大ふ恐怖して種〳〵ふ防ぎれども猛勢自在の愛化な
りれハ如何ふも爲方なく京都へ訴へ〳〵れハ帝聞しを驚ろせ給ひ急ぎ
誅伐せらるべして坂上田村麿と將軍〳〵て許妻の官軍とさむけ給ふ田村
麿此嶋ふ渡り来て力を尽して攻給ひ〳〵ども霧と翔て霞消る妖怪
なれば輙く討取給ふまるる難く大ふ悩ま給ひて瑜伽大權現ふ奉幣



して丹誠を抽で宣ふ拔く度惡鬼退治の勅命を奉て遥ふ此嶋ふ下向ハ
しく〳〵も元来不側の妖物ふて〳〵人力敵ふぬ所ふ其ふ清潔の神
密ふかる妖魔ハ住せん夏且神威のかろ〳〵ふ仰ぎ願く此ふ二ツの霊驗ふ
顯して我威力を加へて惡ふ祈願を凝し給ひるに霊驗忽ち現れて彼妖鬼
ども中ふ一鬼ハ翻て將軍ふ隨ひ奉て攻べき謀を〳〵示し奉ぬれ
田村麿大ふ悅び給ひやて彼鬼兒を妻内〳〵て數千の軍兵を引ぬ直ふ
誅戮し給ふ時ふ波河里羅王も幼術神威ふ權れて心の如く働ハ得ぬ身を
失ひるるれば此度ハ勝利ふ幸竟鬼兒ハ心を改め軍を導ハく故ふれば〳〵て此
嶋を鬼島ふ名付し〳〵ぞ又其鬼〳〵も人を祀ろれて美女ふ童ふ
化て紅粉を粧ひる所を化粧峡ふ〳〵ひ兒ハ他化粧岩ふ〳〵ひ人ふ〳〵
ア斯て田村將軍ハ神霊の驗ふて出敬の餘ア小荒界ふる堂塔悉く修理を

加給ふ彼鬼兒軍歌とうたひ奴の後親と殺しの罪と思ふや自ら
共に死せり田村將軍ゑぞ夷を給ひ梁おの文書と山中に連給ふ
世尊瑜伽の鬼墳と是より其後不思議なる鬼靈七十五の白狐と化現
して殘害毒毒の心と翻し大權現の使隼となつて佛法守護の善神なり
衆生の患難と免さしむ其後源平の挑戰の砌り兵乱打つゞき弘建慈の
大乱り世中鎮謐の期なくして諸寺諸社灰燼せし須臾山も殆衰微
ホ及んとせし人皇百十代後水松院御在位の頃增叫僧正と尊化大德ホ
しるゞ當寺に擔任給ひて滅るん千法燈と挑起給ふ法脈と継給
ひしゞ來り連綿と相續して今に至り又近く天和年中に故有て吉來りて
踊と改め瑜伽山蓮臺寺慈聖院と瑜伽と則ち慈悲相應の德と以て名
づけ蓮臺と妙法の心蓮臺とのふり慈聖ハ彼行基菩薩の手づゝ造



給ふる大慈聖像の御座と所ちいふ意なり其余龍王社ハ辰巳の
方に鎮り給ひ妙見宮ハ丑寅の方遥に高山の嶺にまして渡摩
堂御影堂持佛堂妻寶塔二王門末社の垂跡にいくらもで悉く
由緒あるゞもあれと畧して其大概と記しぬ
靈佛靈寶御震翰の類諸家御寄附物和漢の名書畫珠器奇物ホ数
妻有ふゞも支繁くして記し支能ハ畧之別紙御寄附帳に著しのれハ是を
見べし當未年三月上旬本尊寄靠
靈方拜見例年御祭禮ハ正月廿三日六月廿三日是と夏祭九月廿三日ホ何れも
と許さる
御修法執行あり參詣群集夥し二月初午日稲荷社の祭禮いり
一鳥居 田の口ふりのゞる町の合口二鳥居 町の中間にあり大門再建の地ハ則此鳥居の上の方石だんの上いり
兒ゞ池 一の鳥居の東の方にいり
化粧坂 化粧岩 妖怪の変化せし所と云一の鳥居より三丁計上ホあり

## 石川善左衛門成一墓

本堂の傍地藏堂の左右

石高凡五人扶一人七寸計
臺高一尺二寸方三尺計

石川氏ハ後花園の御宇寛文の年間歴史ニ所せゝ當国児嶋郡ニ来りて数五穀豊饒の方策をめぐらし上ニ忠勤を下ニ仁慈を施し萬代水旱の愁いを助くるを侯て其恩徳の有ること後世ニ伝へ尚忘却せざるゝんが為郡中より百六十年の後文化二年其ゆかりの石碑を鋳て此山上ニ建る所あり石碑左の如ク

金一ノ四十三

石碑銘曰

抑〻此吉備の郡ハ八千早振神代ニ二柱の御神八の剛ヒ給ひ其ニ〻ハ
まろハのれど迚も世ともせ豊ろ〻ぶ彩雲の年毎ニ森旱に田畠をそこなひ
る今〻より百年余十年廿昔ともせ穀実の〻ぶ嶋人最苦わ拯るゝ事愈ニ年四
月ニ〻雨さ千旱つゞて七月中廿八の日ニ〻空かゝ墨雨ふるさゝに
降ニ里の山〻より水四方ニ流ふ溢て絶たゝの家を流し田畑の道を崩し水
ハ溢るゝ人さゝをさハ為る斯ゝ首の居さゝ所を大人を八月望の日此島ニ
下ニ給ひ医師を使ハ給ひ紙人を養ひ疫病の夜を為ゝ水ニ祭る民を助け
給ひれば嶋人ども喜び礼御恵を流波山の彩ゝをのあ〻ぎるかなて園ニ生ル
ヒ志ゝ〻ぐ〻を申ゝる祈ゝ其年も春ハて五〻月中
の七〻の日同所ハ未ニ荒る田畠崩れる道〻をそはゝ〻ろせる此時百ニ
池を〻ゝ旱の烈ひを除むゝ〻ろ所青人草浅かり出ゝてゝ金の土を〻〻
ゝ〻せ角障経巌を書〻〻ぐ〻せゝ八撲ゝ山せる山を〻ゝ〻ゝ〻ゝて先福
江村林村の上ゝ池を紙〻ゝ抜湖ゝ号ゝ夫ゝ〻ゝ未見村の上ゝ森池緯
田村柳田村小川村ゝ緯柳池下村小曲池田ゝ村ニ集池長尾村小天王池ゝん

どもぞ作りし其ころ所にて所さくら此池ぞおもくしあむしとて湖のよしいふ事
ともかけ出て天つらふ蓋の山をめぐり黒滝の夕は猿のやどもに帰りて鳥羽玉の秋
をさへ安くいふも経し六月のてりさかくくも山に登り里ぞめぐり秋月の冴に
くるつもみさえの氷とち芝の霜をふみもあらし労ひをうたくくべむ幣のを國乃
野は此水をもちあし功もかくぞ尊べし翌年寛文四年八月末の七日君御駕を出し
給ひ郡をめぐらせ給ひし時もん本林池福林湖とも見ましたとうたくとの事など
愛給ひ天の池の堤にあり給ひし時國内あまくあまき池どもをたはやすく作らせ
し事をかめ給ひ即御衣をぞ下し給ひ専らの後も猶つきで池ぞをり
し又蕨の山乃かたよりめぐらせしかけひの水とて天城邑の田畠をやし
ならしむ終に新玉の十年余りにしてすべて二百に余る池をぞおうるすでにして
寛文八年六月朔日の日より八月中の七日比まで雨さらにふらざれども此年
の廿日の旱にも行く渋苗をやしなふに水によろしみあふりけれバ秋に至りて
例のごとく貢を奉りけるにぞ池の徳はいちじるしかりけれバ土民小人も昔
より旱の畠のをりやし森になのこを流せし物ひも今より後へはいかで
らむとよろこびけるとなんいしもむ是より前つかた寛文五年正月



末のころの日君御前に召て縁ける給ひ給の司になし給ひけるが数々ども多くて
寛文九年十月の頃より病の床にふして終に同年の極月朔日の日寂滅の世
のならひなれば齢六十余二の年にして身まかりぬまことに十年かちに此
昔より大人五十余り新たなるをやかたひらくるをかくとめし池水の深き恩を
うけし綿人等ともに云つたへて悲しむまたへ代ぞあるむかしなるべき今はそや百
年余り六十年此昔にありけれど志かるせしより此ろき世嶋の縁ひはのの本
のいやつもりにし常へ新保乃田面さるに開かしもすくく此大人の功によるとそ
有りけしと古人云綿人等継て今年文化二年綿人報恩の為に瑜伽山
蓮台寺の内に碑を築きて其忠魂を祭ることとなりぬ
こたびの石川成一の勢語ひし文をかくはこそのおりてこそさらんく庵乃文
またハ女童にも見るかゆえんるをおもひて我等の大和文に書む事を人ぐ
みなまでよて蔵元吉尚志うもがな蔵の振乃はなさいさわしと其の緒比ゑど
それ又おもひはかつぐ拙き筆に書えぬことをおもふのそ

臺の左の脇ニ鐫

當郡中 上野八良平保満 三宅佐四郎廣隱 中嶋三良四郎宣光
三宅安太郎弘道 今田千右衛門信章

金一ノ四十五

小川橋本味野赤崎　下村より下津井へ渡る間の濱をうり濱なり

釜島城趾　下津井の東久須美の端のむかふ沖にあり

天慶二年前伊豫掾純友殘黨をひつめ此地小城郭を構へ備後島田惟乾備前刑干高両勢都合三千余騎にて攻寄るしいでも賊徒大勢にて敵かゝ大に敗に故に播磨備前両国ハつも要ゝ安藝周防より南海四国の勢皆純友が手に屬し其勢強大なりしぞ

同三年純友退治のゝ為に藤原倫實を大將にて五畿内の勢四千余騎紀伊淡路の勢千五百余騎と西國小差向る官軍数ゝ攻戰ひしかども城を取ずして勝利を得ず終に官軍討負て遂彼の國に引退くぞ其後純友九国二島を領ひ勢ひ盛んなりしかども天慶四年六月終に官軍のために滅亡ぬ

前太平記巻第七

去程に純友が討手にして山陽道に向らき十左衛門藤倫實六千余騎を引率し二月十二日に都を立て二百余艘の兵船に乗同十九日の辰の刻に

備前國釜が嶋に推寄敵の陣を見渡せば東の洲嵜は海の面南北十町計り笠石を以て屏風を立てたるが如く切岸の畳んで其上に屏を塗て二重に高櫓をかまへ北の方は海の中に乱杭を茂く打て遠浅に島を立させしかぞ搆へたり南の礒には兵船二三百艘浮めさせ横矢を射んと支へたり城中に道園の武士住居せりと見へて白旗赤旗裾村濃稲妻裾濃月に星水に流巴帆掛船月結輪違ひ村千鳥雲に翔る潮に映じ勢の多少は知らねども色々の紋画きたる旗四五百流れ汐風に翩翻して錦を洗ふがごとくなり寄手先紀伊淡路の中より水練の達者五六十人勝つて各物具脱ぎ捨て海中へ飛潰し数百本打たる乱杭一本も残らず抜て捨て早雄の兵兵船十艘廿艘づゝ漕寄せ遠浅に馬を追下しひた〳〵と打乗て搔楯の際櫓の下に打寄て唯一揉に挑み合ふ城中には鳴をしづめて横矢差矢の差別なく



散々にぞ射られける　中略

此城唯今落べしとぞ見へたりける推亮純素は汐通しに居たりしが時の声矢叫の音波にひゞき山に答へて夥しく聞へければ去は軍始りしぞ相図の時節今なるべしとて其手の兵船二十余艘揉に揉で漕来り大嶋の瀬戸を指塞ひで鯨波を作りかけ浅さ〳〵と攻られれ純友が勢力を得色を直して戦ひける官軍前後に敵を受け進退自由ならざりければ終に戦ひ負て藤戸の渡りを廻つて讃岐路へと引たりけるとぞ

田之浦　下津井の内にして東の浜をいふ舟着にて波戸の構へあり

吹上の浦　田の浦の西に續る是も下津井の内にして着船の湊なり正慶元年三月後醍醐帝御謀叛によりて隠岐の國へ流されさせ給ふ時妙法院尊澄法親王は讃岐の國へ流させ給ふに備前の國までは陸地を經て兒嶋の吹上より船に召して讃岐の詫間につかせ給ふとぞ

下津井浦

田ノ浦

天神社

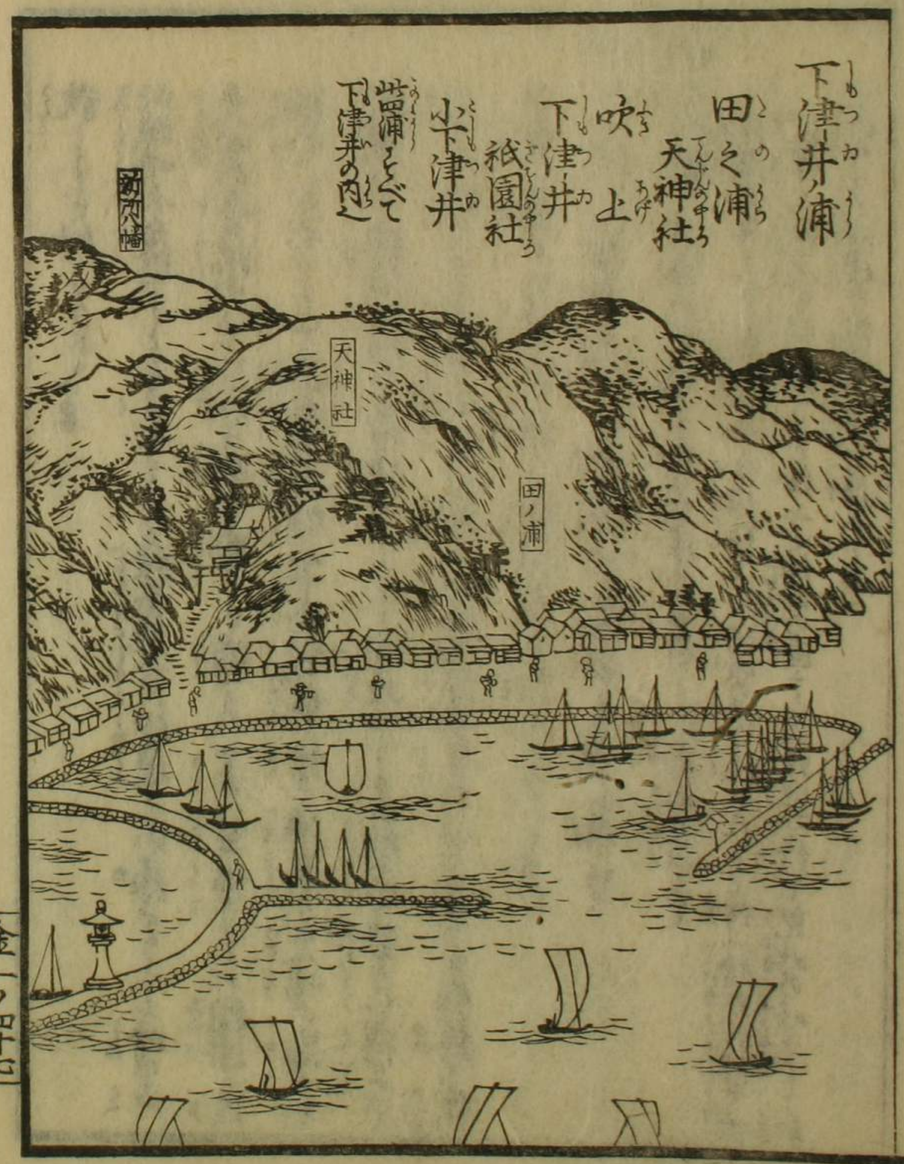
吹上

下津井

紙園社

小下津井

出浦とゝゞて下津井の内




金一ノ四十七

扇ヶ峠

下津井の浦の山ゟ見ち人扇ヶ峠ダワトいゝ

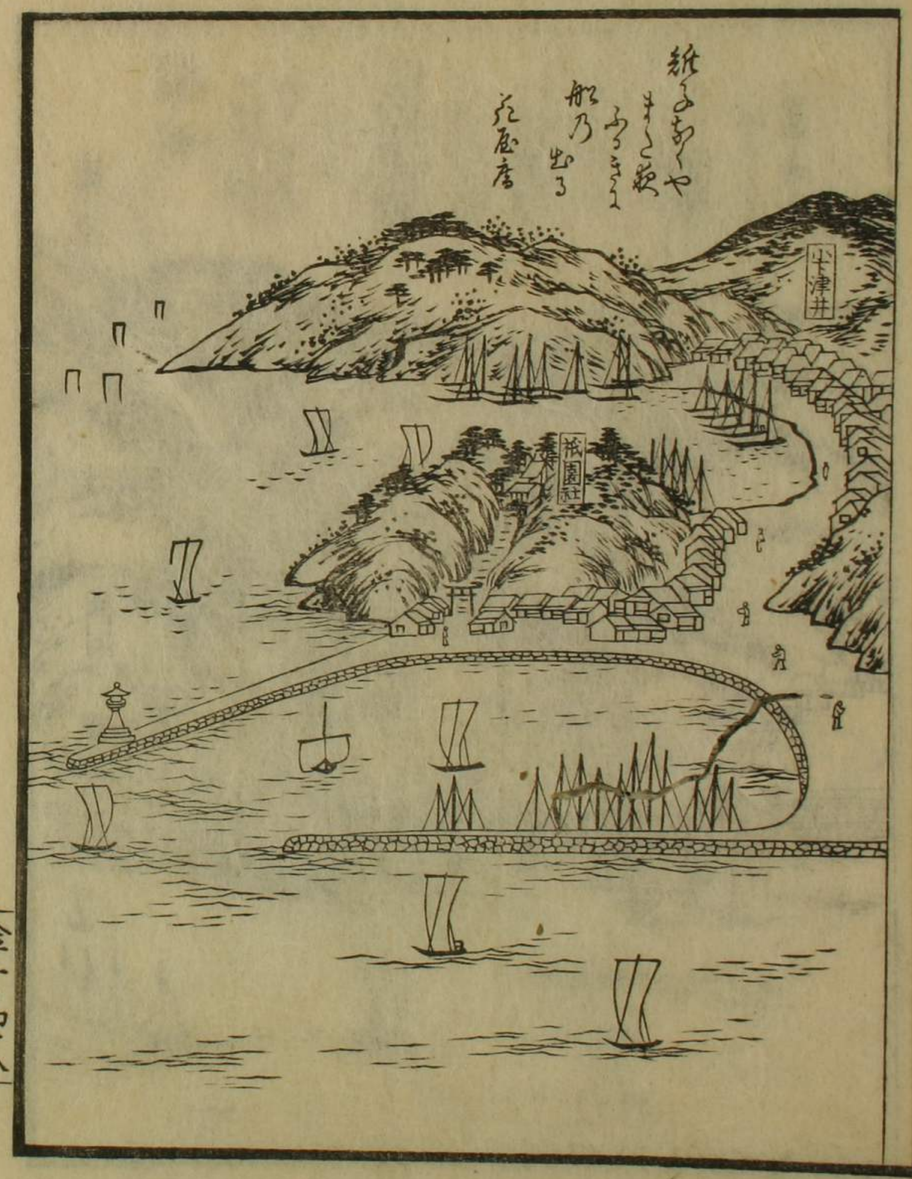
新荘八幡宮

阿津村の山上ニあり

赤崎津明神の生土神ニて

本荘八幡宮

下津井ゟ一里西ニあり




金一ノ四十八

## 下津井浦

下村より二里行西へ行り児嶋郡西の端なり

### 小下津井

下津井の西に並ぶ

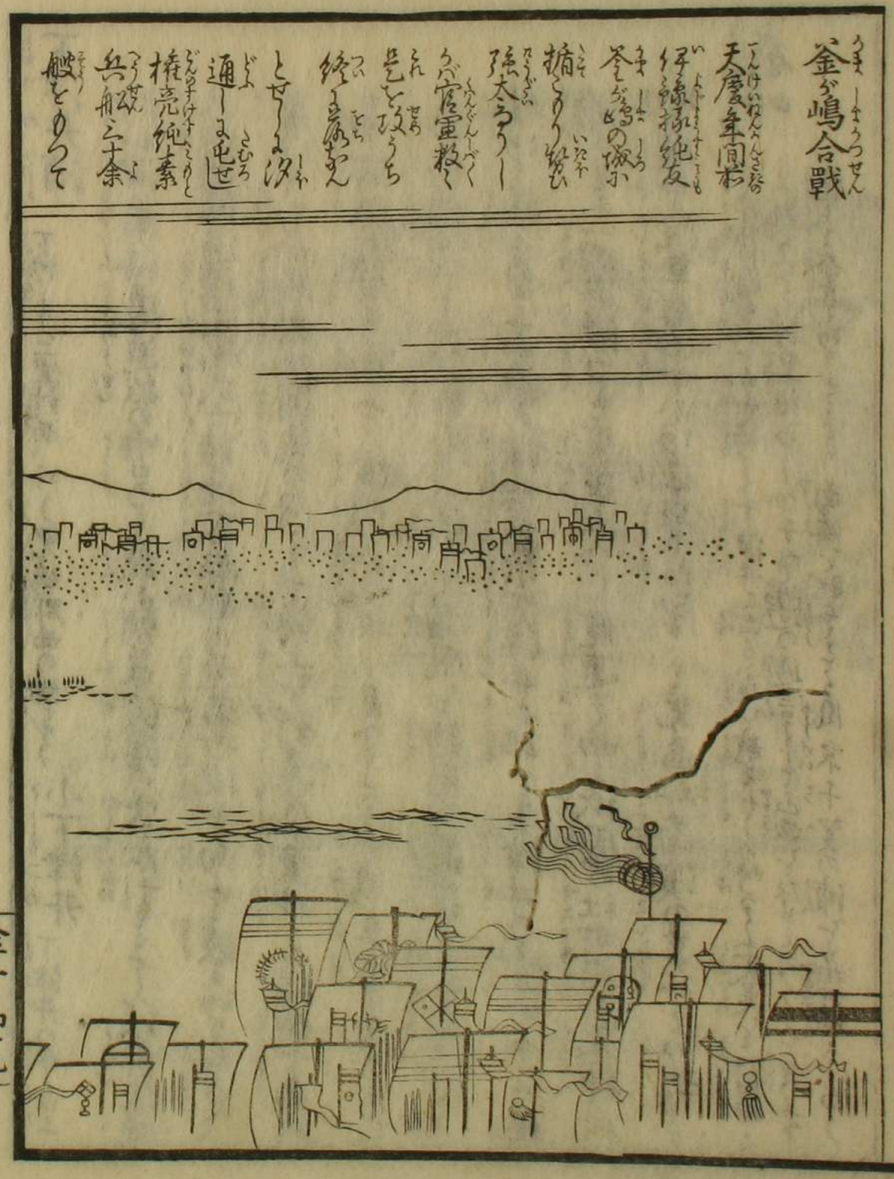
抑此浦南海道通船の喉口なる故に朝暮渡海の客船もくゝび金毘羅
参詣四國遍禮出家武士諸商客都鄙の老若打混じ向へ渡るゆゑ此方に
着いなり向路は備州閑亀の府にて海上七行支凡五里沖に塩飽七島より
島山此彼に列なり向へは讃州の山々峯々見すゝりて風系言んかたし
且中国西國上下の諸船ゆゝに泊りて順風を待いなは高家に交易成り
積いなり揚るあり其上四の浦吹上村小下津井小郷と下津井の小名にして四
浦ともに一圓の湊なるまゝ人家ちゝ建連て西に祇園の社町内に天神社
聖廟寺院草庵山中に点在して繁昌なること児島郡南濱の第一といふべし

### 扇峠

下津井の後の山を云赤崎に下津井に出る小道あり越るおゝの峠なる土人是を猫輪と
則ちたゝげの畧語なり言りて山坂しとなれしなり
岩上に茶亭あり南海を眺望すること風景千変の浦なり相傳

## 釜ヶ嶋合戰

天慶年間に伊豫掾純友釜ヶ嶋の城を拵へ孫太郎小官軍を敗とせしよ汐通しよ屯せ樁亮純素兵船二十余艘をもつて





こゝに漕よせ見と援く城小官軍勝利をうしおひ濱州に敗走ばしそで此汐通しといつるも四嶋の漁夫ゆう

名産鱆　下津井の浦にて多く漁い鱆諸所へ出るとくべつ出るの味ひ美ひ

大嶋　下津井の西浦呼松村のむかいの沖にあり

夫木集

大島やちちの塩あひと釣舟の梶とりつくや魚もとる氏　恵慶

大島洋　前に同じ

真那辺　下津井の西南にあり

山家集

まなべしま　あさんぐもの下りてやすらのつくしのあまもあひて
やまと絶のしまにてうらさびたんぞろうやはるとこそて

まな那辺　とり　絶へかつしかあへつとめひとて渡るくれり　西行

塩飽七島　下津井の向へ左右の海にあり

本嶋　塩飽第一の本島なり泊浦宮の濱新家甲生笠島の浦屋釜大浦福田浦尻濱浦生濱浦小坂浦島中多くの漁師番通の類ひ住ひ廻り凡三里余あり

向笠嶋　藿ヶ小嶋　辨天島　長島　馬ヶ小嶋

廣島　本島の西にあり江浦立石浦青木浦市井浦茂浦廻り九三里余あり

下津井浦後山
扇峠より南海
眺望之図

塩飽嶋之大概

廣嶋　高見　間
牛嶋　凡八十間
高見　凡壹間
佐柳　凡七十六間
牛嶋　凡廿六間
手嶋　凡百六間
小嶋　凡廿六間
小嶋　凡十七間
瀬居　凡廿六間



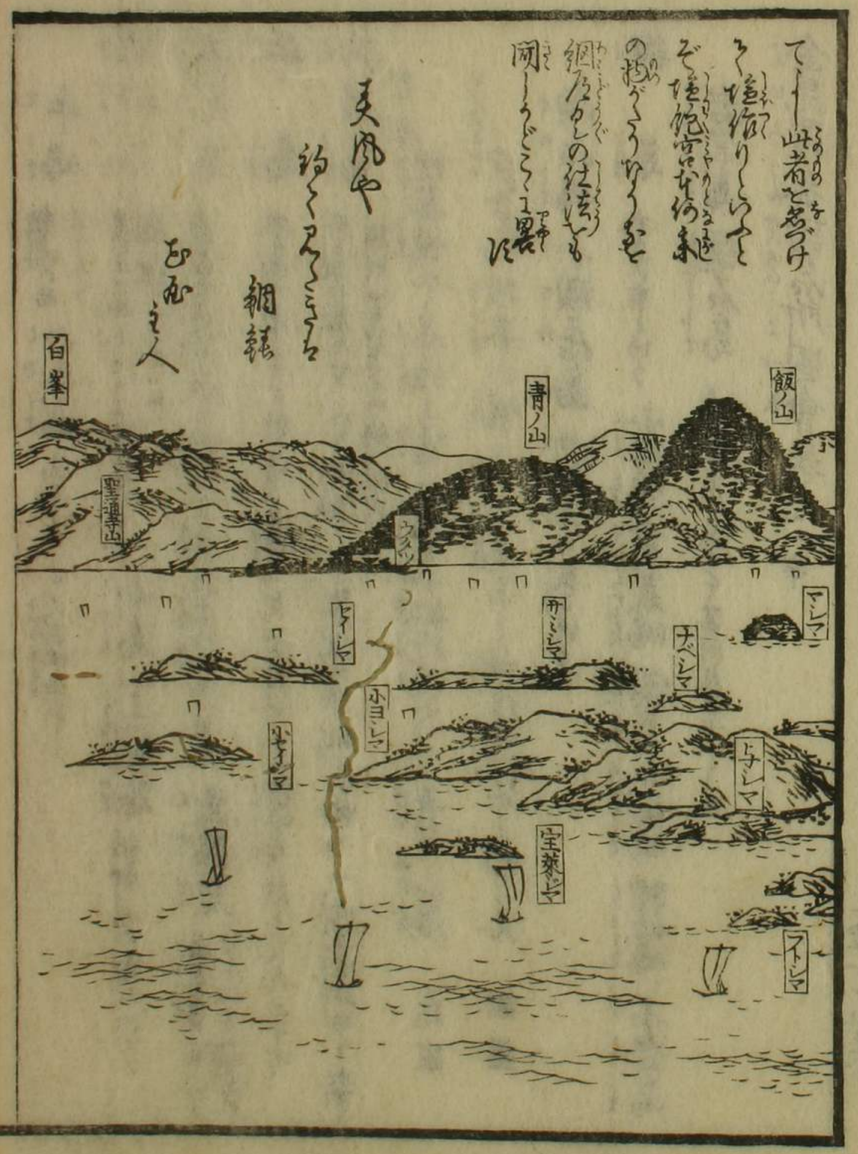



小瀬居　凡十九間
與島　凡廿一間
小與嶋　凡十六間
岩黒　凡八間
宮茅　凡九間
櫃石　凡七間
長嶋　凡十六間
彼佐　凡十七間
向島　凡廿八間

牛島の海峯を隔
てゝ小所あり此峯の
形ハ恰く豆腐の如
く切長くして海
中へ入こと
四ツ谷のやうにて舟も小

魚頭山
九鬼
トマシマ
ハサシマ
ヒメセシマ




飯ノ山
青ノ山
聖護寺山
ウスリ
マシマ
ナベシマ
カミシマ
ドイシマ
ホヨシマ
ムナシマ
トナシマ
宝蔵シマ
アトシマ

手嶋 鬱崎の西八丁あり 小手嶋 山のごとくして人家田畠あり

小島 下二面島 佐柳島の南にあり

佐柳島 廣島の坤にあり其間凡一里余 島の町一里余と云

高見島 廣島の正南にあり凡一里島の回凡一里余 蓋節岩 高見島の東にあり かたち似て越前

牛島 本島の南三十丁計にあり島回り凡二十間計と云 沙弥島 渡る支凡二十町

沙彌島 牛島の辰の方にあり狹峯 家集 も云理源大師誕生の地なり高其間趾あり委く

八幾州聖通寺の條に記す

夫木集 狹峯嶋や真嶋に通ふ海士小舟行帆かけて青の山風 爲家

夫木集 ゆざれば狹峯の嶋に鳴千鳥あはれ孤道の汐やそつこん 顯盛

瀬居嶋 小瀬居島 沙弥島の艮にあり

與島 本島の東にあり 小與嶋 突兼嶋 鍋嶋 二面嶋 羽佐嶋 不登嶋

岩黒島 櫃石島 長島の東にあり其間凡二十丁ト云

金毘羅叅詣名所図會卷之一畢

東京大学図書